新養蚕を現地に見る

北原さんと本田さんの場合

養蚕業が「斜陽産業」などといわれながら、いまなお伸びなやんでいるいったいその原因はどこにあるというのでしょうか。

桑―蚕―繭から生れた製品の「絹」が国際的商品として十分な価値をもつていながら、合成繊維製品の擡頭や繊維業界の激しい競争からハミ出したといえばそれまでのこと。しかし、もつと根本的な原因が養蚕家の経営方法にあることに大きな眼を向け、そこから生れた反省と批判とによつて新しく立ちなおる姿を、これから追つてみたいと思います。

養蚕業の背景にあるもの

最近、ナイロンをはじめビニロン、テトロンなどという合成繊維製品が大衆の日常生活にもてはやされているのは、何といつても安くて強いということがおおかたの理由です。一方、「絹」はどうか？といいますと、まづ〝高い〟ということが主な原因となつて、それらの人たちから敬遠されているのが現状のようです。

その上、従来の米国向けの輸出が、その国の市場の不況などによつて次第にうすれてゆき、けつきよく、絹製品は国内はもちろんのこと、国外からの需給事情によつてもふるわなくなつてきたことが結論的にいえると思います。

従つて、このような状況の中で、現在繭の生産をやつておられる養蚕農家の方々が、いつたいどのような方法によつてこの不況を切りぬいていかねばならないか、ということがもつとも大きな関心事であり、命題でもあるわけです。

そこでこの難題を解決してゆくために従来から行われています養蚕（これを慣行養蚕といゝます）を根本的に検討したところ、その経営方法がきわめて保守的で、農業経営から遊離したところに大きな労力のムダや経費の負担をかゝえこんでいることがわかつたのです。

このような問題点を捉えて、養蚕をより合理的にそして有機的に農業と結びつけてゆきながら、生産された繭が農家の利潤を保ちつゝコストの引下げに向つて立ちなおろうというのが「新養蚕」の方向ともいうべきなのです。

新養蚕とは

では、「新養蚕」とはどのような内容をもつたものか……すこしくわしく説明しますと、養蚕を農業経営と密着させることを前提として

1　ムダな労働力（桑園経営のためにとくべつに使われていた労働力）をはぶき、そのぶんを農業経営の方へ廻しながら

2　いつぽうでは、桑園の栽培方法を改めて反当り株数を減らしますと、それだけ手数がへり、その上風とおしや日光の照射がぐつとよくなつて一株当りの質の良い桑葉が倍以上にふえ（従来と較べ株数は減つても桑葉の生産量は変らないこと）

3　栽培期間中の間作（えんばく、コンモンベッチなど）の自給飼料で役牛や乳牛が飼えて蚕畜一体となり、その厩肥をこんどは桑園の肥料へと還元しながら、地力を培養してゆくと、だいたい以上のような姿で、養蚕の伸びなやみを打開する唯一の途が生れたのです。

しかも、この新養蚕は、県が県下二十五ケ所の実験農家の体験を通して、現実に体系化したものであり、昨年から五ケ年計画（三十七年まで）でその大いなる伸展をとげようということなのです。

そこで、さつそく二ケ所の実験農家を訪ね、新養蚕とは何か、ということを現地の姿から捉えてみました。

★……★

南関町（玉名郡）の北原四郎さん

■　間作のの自給飼料で赤牛も気楽に育つ……

養蚕家の九八パーセントが戦前から今日まで桑園を持ちつゞけてきたというのですから、北原さんもその中の一人。

桑園二十アール（二反）のほか、水田（普通作）四十アール（四反）、そ菜園芸の普通畑が五五アール（四反五畝）、これに役牛として赤牛（おす）が一頭という経営規模です。

この地区の養蚕農協長をやつておられる北原さんは、

「桑園は祖父の代からやつているのですからもう六十年来のものです。新植桑園をやつたのが三十二年の十二月末で、まだ二年目というところです。しかし繭の反当り収量が一昨年（九四キログラム）二五貫であつたのが、昨年では（一四六キログラム）三九貫と一段とふえ繭一貫をつくるのに二十貫ほど要つた桑が十五貫ですむようになつたのも、やはり新養蚕にもとづいて科学的、経済的な給桑型式をとりいれた結果だろうと思つています。つまり、蚕がもつとも桑を多くたべる時期は五令期（壮蚕期）といいましてね、全体の七〇パーセントに当るんですが、この場合の蚕の飼育にビニールハウスをとり入れたのです。このビニールは約二反分で二十グラムほどの重さですから経費は三千八百円ですんだのですが、温度は常に摂氏の二一度から二二度ぐらいに保つ必要があり、なかなか神経を使いますね。ちようど時期が悪くてお見せできないのは残念ですが……」

と雨あしの立つている庭を眺めます。

「蚕畜一体という意味で北原さんの場合はいかがでしよう？」

「えゝ、その点の効果も大いにありますね。つまり桑園の間作としては、冬作ではコンモンベッチとえんばく、夏作はグラスダウンと秋大豆……といつたふうに牛の飼料作物が十分にとれて遠方から運ばずにすみます。それに労働力の節約はたしかに期待ができ、また肥料も殆んど堆肥を使つて水田や桑園に廻しているところです」

「桑園も六十年余りとなると、樹令からいえば相当古いものもあるわけでしようネ」

「そうですネ、桑の生命も三十年はつゞきますが、理想的には十五年以上もたてば抜根して新植する必要がありますよ。とにかく、七、八年目というのが桑量としてもつとも多い時期ですから……」

この北原さんの養蚕組合では、新農山漁村建設計画の助成をうけて、蚕蛾の産卵を孵化する催青所を設け、これを村の共同管理場としているそうです。

こゝに蚕の完全変体までの経過を飼育の面から説明しますと、これが一令から五令までに区分されてあり、一令から二令というのは稚蚕期で共同飼育され、三令は中蚕期で普通飼育、そして四令―五令というのが壮蚕期となつてビニールハウスで繭の形をとゝのえてゆくことになるそうです。

そして、この繭は、春（四月二五日から五月二十日ごろまで）、初秋（八月五日から二五、六日）、晩秋（九月五日から二五、六日）、晩々秋（九月十五日から十月十二日）と四回に分けて、十日後に繭出しが行われるわけです。

★……★

中央村（下益城郡）の本田一成さん

本田さんは、甲佐の町を出て緑川を渡るとかなり高い丘の上に一家を構えています。まだ二六才という若さで奥さんに子供さんが一人。農家の経営規模としては、水田が二十三アール（二反三畝）に畠が九十七アール（九反七畝）というのですから、稼動力二人の割合からいいますと大へんなものだ、ということが想像されます。その上、庭先から赤牛の啼き声がさかんに聞えてきますので畜舎をのぞいてみますと、十ケ月のオスが一頭、四才のメスが一頭、さらに、その乳首のあたりを動きまわつている三ケ月の仔牛が一頭と、たいへんな賑わいようです。

さつそく、上天気の青空の下で、すぐ近くの桑園を見せていただきますと、さすがに、この一帯が繭の発祥地だといわれているだけに、整然と植えてある桑の幹が一面に展がつて見えてきます。

そして、間作にコンモンベッチとえんばくの混播が鮮かないろどりで株と株との列のまん中を敷きつめたような感じでつゞきます。ちようど桑葉の発芽の前で時期外れではありますが、うすい褐色の細い幹が、一様にひと株から五、六本づゝ生え揃つて、陽光に白くかがやいています。

「面積にしてどのぐらいあるんですか」「三十七アール（三反七畝）というところですが、これを株数になおしますと、十

■　本田さんご自慢の新らしい桑……

（次頁へ）